

中山間地域の温泉地における回遊行動に関する一考察

熊本大学大学院自然科学研究科 学生会員 ○塩田幸司

熊本大学大学院自然科学研究科 正会員 田中尚人

1. はじめに

わが国の中山間地域の多くは過疎地域を抱える一方で、多様な地域資源を有しており人々を魅了する存在でもある。また近年の交通ネットワークの整備が都市地域からのアクセス性を向上させたことからみても、中山間地域においては来訪者にその魅力を十分に享受してもらうための取り組みが重要となる。

本研究の対象地である黒川温泉（熊本県阿蘇郡南小国町）は九州山地の裾野に位置し、その独特の風情が人気を博して近年多くの観光客が訪れるようになった温泉地である。しかしその反面、流入自動車の増加が駐車場不足や周辺道路の交通渋滞を招いており、また頻繁な車両交通や地形条件などの要因が歩行者の回遊行動を阻害する現状にある。このような状況下においては山あいの閑静な温泉地という風情の喪失さえも危惧されていることから、黒川温泉においては特に街路空間の改善を図るための整備が課題となっている。

本研究では、中山間地域に立地する黒川温泉の街路空間における現況問題の中で、主に回遊行動時における阻害要因について分析し、その原因、背景を考察した。本研究は、黒川温泉の街路空間のあるべき姿を提案するための、回遊行動の問題点の実証を目的としている。

2. 黒川温泉の特徴と街路空間に関する現況問題の整理

(1) 黒川温泉の特徴^{1) 2)}

黒川温泉は阿蘇外輪山と九重連山の裾野、標高 700 m 地点の溪谷に位置（図 1 参照）し、筑後川源流の田の原川沿い約 4 km にわたって温泉街（旅館 24 軒）が広がっている（図 2 参照）。文献に登場するのは江戸時代中期で、かつては湯治場として栄えたものの、明治以降の交通体系の変化により鉄道駅のない黒川温泉は周囲の発展に取り残されてゆく。その後、1964 年に九州横断道路（やまなみハイウェイ）の開通により一時的に観光客が急増し、新規の旅館も次々と開業した。しかしその開通効果も一過性のもので、他の魅力に乏しか

った当時の黒川温泉は再び閑散とした温泉地へと後退した。このような状況を打破すべく、当時の黒川温泉の人々は温泉街の改革へと乗り出す。趣向を凝らした露天風呂づくりや景観整備という一連の取り組みが功を奏して次第に客が増え始め、現在では年間 100 万人が訪れる人気の温泉地となった（写真 1 参照）。



図 1 黒川温泉の位置



写真 1 温泉街の様子



図 2 主な街路の位置と名称

(2) PCM手法に基づく街路空間の現況問題分析

街路空間における現況問題を整理するため、PCM（Project Cycle Management）手法の「問題分析」プロセスにより諸問題の構造的分析をおこなった。ターゲットグループを「歩行者」と設定、中心問題を「街路空間における安全性・快適性が損なわれつつある」と設定した。以下に分析結果を述べる（図 3 参照）。

① 流入自動車による交通問題の発生

狭小地であるため交通施設容量の不足が温泉街における交通混雑を招いており、特に自家用車を利用した観光客が集中する休日における混雑が目立つ。

② 回遊行動を阻害する障壁の存在

幅員狭窄部における車両交通は歩行者の行動を妨げ、交通安全の見地からも危険である。また起伏に富む地

キーワード 中山間地域、回遊行動、街路空間、バリアフリー、黒川温泉

連絡先 〒860-8555 熊本市黒髪 2-39-1 熊本大学大学院自然科学研究科社会環境工学専攻 TEL 096-342-3579



図3 PCM手法を用いた問題分析

形は脚力に劣る歩行者の移動を妨げる要因になりうる。

よって以下の章では、流入自動車による交通問題と回遊行動の阻害要因について検証する。

3. 自動車交通に着目した問題分析

黒川温泉はピーク時には1日約1,000台の自動車が流入するが、公共駐車場の容量は168台であり、旅館保有駐車場と総計しても674台しかないため、日帰り客が集中する休日になると駐車容量が不足する現状にある。特に駐車場Eは観光案内所を併設し、また温泉街中心部に位置するため回遊の面においても利便性が高く、多くの自動車がここに集中する。そのため温泉街中心部における交通混雑が顕著である(写真2参照)。



写真2 駐車場及びその周辺での混雑状況

4. 回遊行動に着目した問題分析³⁾

図4に温泉街における主な回遊経路を示す。徒歩による回遊が比較的容易なのは観光案内所を中心とした半径約400mの範囲である。この範囲内における主な回遊阻害要因を以下に述べる。

(1) 立地条件による地形的制約

黒川温泉は幅員の狭い道が多い。図5に「川端通り」の断面図を示す。ここは幅員が最大でも4mほどしかなく、ここでのうろつき交通は歩行者の行動を制限し、交通安全の見地からも危険である。しかしこの道路は

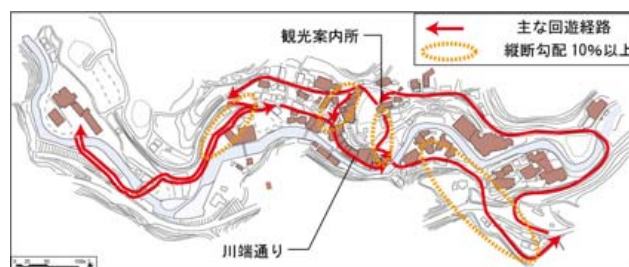


図4 主な回遊経路

住民の生活道としての機能も果たしており、一概に通行を規制するのは難しい。また温泉街の地形は起伏に富み、縦断勾配が10%以上もある坂道も存在する。そのため脚力に劣る歩行者にとっては連続しての登坂が困難であり、回遊行動を妨げる要因にもなっている。

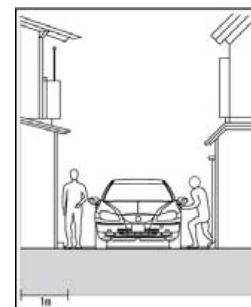


図5 断面図

(2) 温泉街の郊外拡大化

増加する観光客に対応するため、温泉街では新たに拡張をおこなう旅館が増えている。しかし元来の温泉街は敷地に乏しいため、温泉街の中心部から数km離れた山林を開拓して新たに開業するという形態になることから、近年の温泉街は川に沿って東西に拡大しつつある。しかしこの状況は観光客の郊外拡散や元来の温泉街の空洞化を招きかねない。「歩いて湯めぐりを楽しむ」というそもそもの本質を堅持するためには、観光客の回遊行動を検証するとともに、黒川温泉の魅力を引き立たせる新たな回遊経路の整備も必要となる。

5. おわりに

本研究では、黒川温泉の街路空間における現況問題を踏まえて、主に回遊行動時における弊害について論じた。黒川温泉のコンセプト「黒川一旅館」を実践するためには温泉地における回遊は欠かせないことから、今後は回遊行動の実態を主体と環境に分けてさらなる調査・分析をおこない、回遊行動を促進するための具体的な整備施策を考案すべく研究を進める所存である。

参考文献

- 1) 熊本日日新聞情報文化センター：黒川温泉「急成長」をよむ、熊本日日新聞社、2000
- 2) 後藤哲也：黒川温泉のドン 後藤哲也の「再生」の法則、朝日新聞社、2005
- 3) 鈴木敏：道のユニバーサルデザイン、技報堂出版、pp.44-84、2006